

I 実践

1 研究主題

学校・家庭、地域と連携した人権教育の在り方
—地域での福祉体験活動を通して—

(1) 主題設定の理由

本校は、「自ら学び、考え、実行する生徒」「思いやりのある心豊かな生徒」「たくましく生きる健康な生徒」を3つの教育目標として掲げている。その中でも「思いやりのある心豊かな生徒」が人権教育と直接関わりのある目標である。それを受けて、本校では日立市の人権教育の視点から「相手の苦しみ、悲しみ、悩みを共に感じることができる」「分け隔てなく、だれとでも公平に生活することができる」生徒の育成を課題とし、教育活動に励んでいる。

本年度は、「いじめ」に関することが喫緊の社会的課題となったため、教師自身の基本的人権に関わる正しい認識を高めていくことと、生徒たちにも自他の人権を守る必要性について理解させていく実践を進めることが求められている。そこで、様々な人と交流することのできる福祉施設での体験活動を通して、老若男女問わずに公正公平にコミュニケーションを取り、相手の立場に立って考えることができるよう、本主題を設定した。

(2) 研究の内容

ア 研究主題のとらえ方

(ア)「学校・家庭・地域の連携」について

学校を地域の教育センターととらえ、生徒に「いい体験」「いい学び」をさせてくれる地域の人々との橋渡し役を果たすととらえる。

(イ)「人権教育」について

「自己や他者を認め、温かくかかわり合いながら、人や地域社会にできることを探し、実行する態度を育成すること」ととらえる。

(ウ)「福祉教育」について

豊かな体験活動を通して、思いやりや助け合いの心を育てるとともに人権感覚を磨くことのできる、地域社会と連携した「つながり」を深める役割を果たしているととらえる。

イ 具体的な研究の進め方

本校のよさである教科教室型を生かした生徒の主体的な学びを展開するには、生徒の自主・自律性を高め、規範意識の高揚を図る必要がある。そのために、心の教育の充実が重要となってくる。

そこで本校では、「いい体験」「いい学び」をさせてくれる「いい生き方をしている大人との出会い」を大切にする授業を展開し、自己や他者を認め、温かく関わり合いながら、地域社会の一員としての自覚や資質を身に付け、人権感覚を磨くことで主題に迫りたいと考える。

2 実践内容（事例1 —道徳—）

(1) 単元名 「本当のやさしさって？」 （出典 中学校編とっておきの道徳授業Ⅶ）

(2) 単元設定と理由

「波風が立たない」ようにすることを「やさしい」と表現する人間関係が増えてきている。この人間関係から表面的な付き合いをする生徒が多くなってきている。しかし心の底では、仲間同士のつながりを欲している生徒も多い。「本当のやさしさ」と「人間関係の大切さ」を、作文資料をもとに考えさせたい。また、やさしさを出すことで、「ほめてほしい」などといった見返りを求めて他者と接する生徒も見られる。本資料の作者の気づきに、ストーリーを追いながら「見返りを求めない他者へのやさしさ」について考えさせたい。

(3) 資料の生かし方

本資料は、『こどものきもち—未来に続く心のリレー』の中の「小さな親切」作文コンクール入賞作品の中から、中学生の日常的な驚きが書かれた作文を資料として使っていくこととする。また、本資料には「感謝されるのがあたりまえ」と考えていた中学生の心の変化が描かれているものである。「本当のやさしさ」とは何か、じっくり考える場としたい。

(4) 考察及び検証

学習活動・内容	活動のようす	テーマに関する考察
1 この1週間で、誰にどんな「やさしい」行動をとったか発言する。 2 読み物資料を読む。 (1) 場面ごとに教師の朗読を聞き話し合う。 ・「ドアを開けておかなくてもいいよ」と言われたのなぜでしょう。 ・コンビニのドアを後ろの人が入り終わるまで開けておく行為はやさしさかどうか。 ○「本当のやさしさ」とは何か。 3 「本当のやさしさ」についてグループ協議の結果を発表する。	○「係の仕事を手伝った」「家の手伝いをした」といった内容を積極的に述べられていた。 ○「自分が開けてもらっている立場だとして考えること」としたため、ワークシートへスムーズに記入できていた。 ○親切心で「開けている立場」だとしたらどういう気持ちかについて考える生徒も自然と出てきていた。 ○グループの中で、司会者を中心としてワークシートを活用して話し合いが行われていた。 ○必ず意見を発表できるよう司会者が指名するなど工夫した活動を行ったため、消極的な生徒も意見を述べることができた。 ○他グループの意見を聞くことで、「なるほど」「自分とは違う考えだ」といったように自分で考えた意見と比べることのできる生徒が多かった。	○道徳専用教室を活用し、話し合い活動が活発に展開できるようにコの字型に配置した。 ○ワークシートに考えや意見を書くことで、発表が得意な生徒へは自分の意見をまとめるきっかけとし、発表が苦手な生徒へは発表しやすくするための手段として有効であった。 ○他グループの意見を聞くことで、さらに自分の考えを深めることができた。 ○各々の考える「やさしさ」について自他の意見を交えながら今後の生活に生かしていくきっかけとなっていた。

3 実践内容（事例2 ―1年総合―）

(1) 単元名 「生き方に学ぼう ～人に、地域に、自分ができることは何だろう～福祉体験活動」

(2) 単元のねらい

- 自分たちが住む地域やそこに住む人々に関心を持ち、地域の人々から多くのことを学び、これからの生活に生かしていこうとする意欲をもつことができる。
- 地域の人々との関わりや福祉体験活動をする中で、様々な人々の生き方を知り、自分の生き方について考えることができる。
- 福祉体験活動を通して、社会に貢献することの意義や地域を支える存在として自分を高めていくことの大切さに気づくとともに、思いやりや助け合いの心について考えることができる。

(3) 実践事例

福祉体験学習では、「人に学ぶ」をテーマとし、高齢者や障がいのある方々、幼児、社会福祉施設で働く方々など多くの人々とのふれあいをもちながら学習を進めることができた。生徒たちの学習後の反省用紙に、「お年寄りの方や障がいをもたれた方と接するときには、まず話をよく聞くことが大切だと気づくことができた。」「幼児と接するときには、安全面に配慮しなければいけないことがわかった。」といったように、様々な年代の方とコミュニケーションをとる方法について多く書かれていた。同じ年齢、年代の人と毎日接する学校と違い、異年齢集団と生活することで「他者を思いやる気持ち」「他者を尊重する心」を育むことができたように見える。

「いい体験」「いい学び」をさせてくれる「いい生き方をしている大人との出会い」を大切にする授業や体験学習を大切にしながら、地域社会の一員としての自覚や資質を身に付け、人権感覚を磨いていくことが大切であると考え実践している。



4 研究の成果

様々な年代の人と関わることで、自己や他者を認め、温かくかかわり合いながら、地域社会の一員としての自覚や資質を身に付け、人権感覚を磨くことができたと考える。生徒たちの反省から、「それぞれの立場に応じてコミュニケーションをとっていきたい。」という感想が見られたことから、思いやりの心を育てることができた。

II 今後の課題

様々な年代の人と出会うことで、生徒は己や他者を認め、温かく関わり合いながら、地域社会の一員としての自覚をもつ第一歩となった。ここで培った温かな心をさらに学校生活や社会生活に生かしていき、他者の人権を尊重する精神をもつ態度を育んでいきたい。